

令和七年度 神道学専攻科入学試験問題

国語総合

― 注意事項 ―

- 1 問題は5ページ、解答用紙は1枚である。
- 2 解答はすべて別紙解答用紙に縦書きで記入すること。
- 3 試験時間は60分である。

11月24日(日)

Z18A

次の文章を読んで、後の問一～六に答えなさい。

日本の福祉思想――A――

「幸福」について考える時代とは

先ほど「福祉」のもっとも広い意味としての「幸福」についてふれた。ところで、「幸福とは何だろう」というテーマについては、いつの時代も人間はそれについて考えをめぐらせてきたとも言えるが、人間の歴史を大きく振り返ると、⁽¹⁾人々がとくに「幸福」について真剣に考えた時代というものが浮かび上がる。

それは、本書の中で幾度か言及してきた、哲学者のヤスパースが「枢軸時代」、科学史家の伊東俊太郎が「精神革命」と呼んだ時代である。このうちギリシャのアリストテレスは、『ニコマコス倫理学』の中で「われわれがもって政治の希求する目標だとなすところの『善』……は何であるだろうか」という問いを立て、「それは幸福にほかならない」とし、しかもそれは「よく生きている」ことだと論じている。

こうして見れば、既に約2500年前の時代に、ちょうど今と同じように「幸福」と「政策、政治」の関係が論じられているのであり、これは驚くべきこととも言えるだろう。

この点はギリシャに限ったことではない。仏教では「慈悲」や「ニルヴァーナ（涅槃）」、儒教では「仁、徳」、旧約思想を受け継いだキリスト教では「愛」といった原理が提起されたが、思えばこれらは、すべて人間にとっての究極的な「幸福」の意味を明らかにしようとしたものだったと言えるのではないか。

では、そもそもなぜこの時代（枢軸時代）に、こうした普遍的な思想が生まれ、また「幸福」の意味が探求されたのだろうか。

これも本書の中で何度かふれてきた点だが、最近の環境史研究などによれば、この時代は、約1万年前に生じていた農業文明が拡大・成長の時期をへて成熟期を迎え、資源・環境制約や生産過剰なども生じる中で、ある種の根本的な限界に直面しようとしていた時代だった。

つまり、単純にモノの豊かさでは人々の幸福には直結しないということが初めて意識されるようになっていたのであり、だからこそ上記のような、様々な内面的な価値や精神的なよりどころに人々の関心が向かっていったのではないか。

これは現在ときわめてよく似た時代状況であり、つまり、18世紀に始まった産業化ないし工業化の大きな波が飽和し、また資源・環境制約に直面し、私たちは再び新たな「枢軸時代」を迎えようとしている。いま「幸福」の意味が再び大きく問われている意味を、こうした文脈におい

てとらえなおすこともできるのではないだろうか。

ではそこでの新たな思想はどのようなものとなるのか。

日本の福祉思想―神仏儒と「3つのエコロジー」

ここで先ほどの「福祉思想」というテーマが浮かび上がってくる。

ここでいう福祉思想とは、人間にとつての「精神的なよりどころ」とも言い換えられるような広い意味のものである。思うに、そうした精神的なよりどころ、ないし思想的な基盤を見失って途方に暮れているのが現在の日本社会あるいは日本人ではないだろうか。

ここで今後の展望を得る手がかりに、これまでの日本の歴史を大きく振り返ってみると、実は日本人はそうした精神的なよりどころを次のような形でしっかり持っていたと言えるのではないか。

それは一言で言えば「神・仏・儒」、つまり神道と仏教と儒教をそれなりにうまく組み合わせて一定のバランスを保ってきたということである。この場合、大きくとらえれば、

●神道……「**ア**」や「神々」の領域に関わり、

●仏教……「**イ**」ないし「**こころ**」の領域に関わり、

●儒教……「**ウ**」規範や倫理の領域に関わる

という具合に、これら三者が一定の役割分担をしながらトータルな精神的基盤を形作っていた。

ちなみに興味深いことに、フランスの哲学者フェリックス・ガタリは人間には「3つのエコロジー」が重要だと述べており、それは「**ア**」のエコロジー、**イ**のエコロジー、**ウ**のエコロジー」をさしている。

いみじくも、この3つは上記の「神・仏・儒」と見事に呼応しているのではないだろうか。つまり「神道→**ア**」のエコロジー、仏教→**イ**のエコロジー、儒教→**ウ**のエコロジー」という対応関係だ。

そして、上記のようにこの三者をうまく組み合わせるそれなりにバランスを保っていたのが江戸時代までの日本人だったと言えるだろう。

たとえば古代における**エ**が試みたのは他でもなく神仏儒の総合だったし、先ほどもふれた江戸期における二宮尊徳は三者の調和を意識的に追求した人物の一人である。ちなみに尊徳は神仏儒の総合に関し、半ば冗談めかして「神がひとさじ、儒仏半さじずつ」と述べているが、ひとつの真理を含んでいると思う。

しかし明治以降の日本は、残念なことに次のような3つのステップをへる過程で、こうした日本人にとっての「精神的なよりどころ」を失っていったのではないか。

すなわち第一のステップは、明治維新前後から第二次大戦までである。この時期日本は、幕末の「黒船」に象徴される欧米列強の軍事力の衝撃を前に、西洋の科学技術や政治体制等を導入していったが、そのベースにあるキリスト教までを採用するわけにはいかないため、自らの思想的基盤ないし価値原理として国家神道というものをいわば「突貫工事」で作り上げ、それとともに富国強兵の道に邁進していった。この時期はいわば「福祉思想の形骸化（政治化）」として総括できると思われる。

第二のステップは、戦後から高度成長期をへて最近に至る時期である。第二次大戦の敗北により、180度転換する形で国家神道は完全に否定され、その代わり、戦後の日本社会は「経済成長」つまり物質的な豊かさの追求ということにすべてを集中していくことになった。いわば「経済成長」が日本人の「宗教」ないし精神的なよりどころになったといっても過言ではない。この時期を私は「福祉思想の空洞化」と呼んでみたい。

そして第三ステップは言うまでもなく近年から現在に至る時期であり、つまり1990年代前後から、上記のようにすべてのよりどころにしていた「経済成長」すらままならなくなり、動揺と閉塞化が進んでいった。私たちがいま立っているのはこうした場所である。

では、⁽²⁾これからの日本人にとっての福祉思想あるいは精神的なよりどころは何になるのだろうか。

地球倫理へのアプローチ

これについては次節において「地球倫理」を主題にする中で考えていきたいが、以上の文脈との関連で言えば、これからの日本におけるそうした価値原理として、一言で言えば、

「神仏儒」（＝伝統的な価値）プラス個人（＝近代的な原理）プラス α

ということが軸になると私は考えている。

ここでの「神仏儒」は、そのうち「神」がもつとも基底的な自然信仰（自然のスピリチュアリティ）に関するもので（いわば第一層）、「仏儒」は枢軸時代に生成した普遍宗教である（第二層）。

そして、これら近代以前の伝統的な価値を踏まえながら、近代的な原理としての「個人」（あるいはその「自由」という価値も重視する。

しかしこれは「拡大・成長」を基調とする「近代・前期」の原理であり、限界をもっている。そこで「近代・後期」あるいは本書で述べてきた（人類史における第三の）定常化の時代においては「プラスα」が重要になってくるのであり、それが「地球倫理」ということと重なる。

そして以上のうちの「神仏儒」（＝伝統的な価値）の部分は、当然のことながら地球上の各地域によってその内実が異なる多様なものであり、その地域ごとの伝統的な価値や世界観（自然観、死生観等を含む）が実質的な中身となるものである。

環境倫理学者のキャリコットは、地球上の各地域における環境保全に向けた行動は、「伝統的な世界観が秘めている環境倫理によって支えられ、命を吹き込まれる」ことによってこそ有効なものになると論じているが、地球倫理はこうした認識と呼応するものだ。

（広井良典氏『人口減少社会という希望』の文章に基づく）

問一 傍線(1)について、人々がその時代に「幸福」について真剣に考えるようになった理由を、著者はどのようにとらえているか、本文中から五〇字以内で抜き出して記しなさい。

問二 空欄 ア ・ イ ・ ウ に入る最もふさわしい語を次のイ～ハの中から一つ選び（重複は不可）、冒頭の記号を記入しなさい。

イ 精神 ロ 自然 ハ 社会

問三 空欄 エ に入る最もふさわしい人物を次のア～エの中から一つ選び、解答欄に冒頭の記号を記入しなさい。

ア 道鏡

イ 中臣鎌足

ウ 聖徳太子

エ 役小角

問四 本文全体の内容から、空欄 A に最もふさわしい語句を次のア～エから一つ選び、冒頭の記号を記入しなさい。

ア 混沌と秩序

イ 喪失と再構築

ウ 伝統と継承

エ 自然と人工

問五 この文章の要約を、二四〇字以上三〇〇字以内で解答欄に記入しなさい。

問六 傍線(2)について、筆者の見解を踏まえつつ、今後それを形成することにおいて、神社・神職がどのように寄与することができるかにつき、なるべく具体的な例を挙げ、自らの意見を五四〇字以上六〇〇字以内で解答欄に記入しなさい。